

英語で書くといふこと——自然な方向か？

クー・ブーテック

●私の言語体験

マレーシア・ペナン州のジョー
ジタウンで生まれ、育ち、教育を
受けた私は、言語とはいささか特
異な出会いを経験してきた。幼い
頃の私は、家族や近所の人たちと
は、もっぱら私の母語であり、中
国の方言である福建語で話した。

英語を話さない非華人系の人々との
日常的なコミュニケーションの
場面では、マレーシアの公用語で
あるマレー語を控えめに使った。
私の弟妹やいとこたち、友人たち
の一部は中国語学校に通ったが、
私は、植民地期から一九七〇年代
にいたるまで英語での教育が行わ
れていた公立学校に通った。この
間、小学生のときに「生徒の母語
プログラム」のもとで、数年間、
北京語の初歩を学んだ。

こういうわけで、私は学校教育
を通じて、主に試験向けの正式な
マレー語の能力を身につけたが、
当時の学校の先生達や生徒達、役
人達と同じように、もっぱら英語

で話し、読み、書くようになった。
アメリカの大学に進学する頃まで
には、私は、中国語についての正
確な知識は持たないかわりに、マ
レー語には相応に、そして英語に
は非常に通じるようになってい
た。

ある意味でこれは、私を「どつ
ちつかず」の状況へと導いた少々
歪んだ経験だったといえるだろ
う。中国語で教育を受けた中国人
たちはおそらく、北京語ができな
い私を「完全な中国人」とはみな
さないだろう。私は後に、長きに
わたる公務員生活のなかでマレー
語を大いに使うことになったが、
マレーシアの憲法によれば、私は
「非マレー人」ということになる。
そして、私の英語力は、会話の面
でも作文の面でも欠けるところが
ないのに、アングロサクソン諸国
の役人達は、留学試験等の公的な
目的のために、私にレベルの低い
TOEFLのテストを受けさせ
た。私は英語の「ネイティブ・ス

ピーカー」ではないというのだ！

職業生活上の客観的な条件もま
た、私の英語の使用に拍車をかけ
た。マレーシアでは、英語以外の
言語で書かれた優れた最新の教材
を手に入れることは難しかった。
海外に出れば、英語の受容にさら
に拍車がかかった。また、個人的
にも職業上も、海外の研究仲間や
学術界との接触と交流を常に維持
する必要があった。このようにし
て、英語は「自然に」私の研究生
活上の第二言語となったのである。

とはいえ、このような経験は
けっして私に限ったものではない
だろう。地域や国による違いこそ
あれ、かつての「太陽の沈まぬ帝
国」の統治対象となった地域の都
市部——ただし必ずしも上流階層と
は限らない——に共通するものだ
と思う。

●日本の研究者にとっての英 語での執筆の意義

自分の母語ではない言葉で「必

然的に」仕事をし、執筆し、成果
を発表するという経験は、大多数
の日本の学者や研究者にはなじみ
のないものだろう。それとは対照
的に、大部分の日本人研究者には、
日本語だけで執筆し、成果を発表
するに十分な理由がある。日
本には活発な学術セクターがあ
り、規模の大きな研究書籍の国内
市場がある。日本の学者たちは、
一般の人々や学術界の読者、そし
て政策決定者らの関心をひくため
に、最も得意な言語で自分たちの
考えを表明することを選ぶだろ
う。

加えて、日本には研究や出版、
さらには他の言語への翻訳までを
支える豊富な資金源がある。優れ
た研究成果を評価するための形式
やチャネルも整っている。

とはいえ、多くの——とりわけ若
い日本の学者・研究者たちは、英
語が支配的な地位を占める国際的
な学術圏に向けて英語で執筆する
べきかどうか、またそうするなら
ば、どの程度まで英語での執筆に
取り組むべきなのか、考えている
に違いない。英語での執筆活動
を通じた「国際化」には、自分が書
いたものをより広い読者へ向け
て、より迅速により効果的に届け
ることができるといふ明確なメ
リットがある。また、英語で執筆

することによって、自らのアイディアを、世界の専門的な読者たちの基準に照らして厳密にテストすることも必要である。そうすることによって始めて、自分のアイディアが国際的な学術界で必要とされる厳密性、独創性、創造性、深さ、新しさといった基準に照らしあわせて、批判的な吟味に耐えられるものであるかどうかを真に知ることができる。

発展途上国では、研究の基盤がもろく、弱々しいローカルの声は外国語で行われる研究によって、しばしばかき消されてしまう。だが日本の状況はこれとはまったく異なる。一世紀半にわたる近代化と西洋化の過程で、日本語での研究と出版が押さえ付けられることはなかった。日本の学者・研究者が外国語での出版に時間と努力の大部分を割くことになると思えない。その点では、日本人研究者は、英語で執筆し成果を発表したいと思ったときに、それがどれほどの努力を必要とするものになるかを再検討すればいい。英語で書くことはとりたててデメリットにはならないだろう。

日本の研究者たちは、日本語で書かれた豊かな研究成果を、日本語を読めない世界の多くの研究者たちに届けることで、価値ある貢

献をすることができよう。私が知っている日本の地域研究者のなかには、彼らの仕事を支えてくれた異国の人々にも彼らの研究を読んでもらえるようにという賞賛すべき理由から、博士論文を英語で書くことを選んだ人たちもいる。

●外国のパラダイムへの従属か？

英語で書き、英語雑誌に発表することは、よその国で創り出された理論やパラダイムや研究アジェンダへの従属を強いるものだという懸念を抱く研究者もいるかもしれない。だがこれは、いくつかの理由から、誤った考えだ。

第一に、英語の研究もまた、他の言語で書かれたものから多くの恩恵を受け、またそこから多くを借用している。このことは、ラテンアメリカ発の独創的でチャレンジングな研究がなければ、経済発展をめぐる政治経済学研究がどれほど皮相的なものとなっていたかを想像してみればわかるだろう。第二に、英語の文献のなかでも、常に競合し合う複数のパラダイムや理論がある。実際、それはいかなる言語のものであれ、豊かで活力のある研究が生み出されているところであれば、自然かつ当然のことである。第三に、「国産」のパラダイムや理論は、国外に打っ

て出ることをしてみなければ、その真の価値も相対的な価値も評価することができないだろう。現代では、世界のどこであろうと、長期にわたって学術的な「輸入代替」を続けることは困難になっている。第四に、研究者どうしの複数国にまたがる協力は、世界中に広がり、深まっている。このような研究協力の質は、資金の出し手の関心や態度からの影響を受けるかもしれない。だが、有能で意識的な研究者は、常に互いを尊重し、対等な関係で協業できるものだ。そして最後に、言語それ自体が、ものの見方や世界観を決定してしまうわけではない。いかなる言語においてであれ、人は、支配的な言説や、その背後にある実地的な目的に対して服従することもできれば抵抗することもできる。

●英語での執筆への前向きなアプローチ

私の個人的な経験が実際には私だけのものではないように、日本的な状況もまた日本だけに限られたものではない。例えば、東アジアや東南アジアの研究者たちもまた、自国の人々に向けた自国語での執筆と、主に英語で行うことになる世界へ向けた発信とのあいだでバランスをとる必要に迫られて

いる。また、現地語で書かれた研究成果を、その言語を解さない研究者たちと共有することもまた、簡単には答えのみつからない課題である。日本の東南アジア研究では、Kyoto Review of Southeast Asiaが、現地語で書かれた論文の要約―さらに最近では論文全体を他の現地語および英語に訳出するという、ささやかながらも価値ある貴重な試みを行っている。だが、このような試みを定期的に、大規模に行うとなれば、多大な資源が必要になるだろう。

おそらく、英語で書き、発表することへの最も前向きなアプローチは、英語で書くことがもつ創造的な側面と、そこに人々がこめている期待とを強調することだろう。英語を書くという努力の核心にあるのは、世界の教育と研究に対して新たな知見を提供し、研究の方向性や課題、それを支えるネットワークの形成に加わるという目的のために、国際的なアカデミアの強さと限界に対して積極的に関わっていこうとする願いなのである。

(クー・ブーテック／地域研究センター上席主任研究員・翻訳・新領域研究センター 川上桃子)